

<目 次>

○巻頭言	2
○特集 これが22☆23のオリキャンだ!	4
○研究室紹介	12
○OB・OG紹介	23
○飛翔掲示板－サークル紹介・総科アンケート－	29
○REVIEW×REVIEW	33
○飛翔な日々	35
○人事異動のお知らせ	40
○編集後記	42

表紙作成

広島大学総合科学部総合科学科1年 高井 大輔くん

巻頭言

異文化交流ということ



田中 暁
(総合科学副研究科長)

ある日本人の言語学者がアメリカでホテル滞在中、猛烈な吹雪に降りこめられた。近くの大学へも歩いては行けないので車を手配した。十分ほどでオレンジ色の車が迎えに行くからホテルの入り口で待つようにとのことで、そのとおりにした。しかし約束の十分を

すぎても、それらしき車は一向に現われない。二十分ちかくたつたとき、

だった。

ハッと気がついた。さきほどから少し離れたところに茶色の車が停まっている。一人の男がこちらを窺うように見ている。それが自分の待つていた車だった。「長く待たされて見るからに不機嫌そうなその男に、オレンジ色の車が来るといわれていたので判らなかつたと言うと、男は平然として、この車はorangeだよ、と答えたのである」

このように色の問題ひとつをとってみても、日本と外国では表現の仕方がいかに異なるかがわかる。まして考え方や文化の問題となると、彼我の差はおどろくほど大きい。

よく引用される文章なので、一読した人もいるだろう。著者は、日本語に翻訳された小説に「オレンジ色の猫」や「みかん色の猫」という不思議な猫が出てくることも指摘する。さらに、フランスの小学校に入った日本人の生徒が、太陽の絵を描くとき、一人だけ赤い太陽を描いたことを紹介している。他の生徒が描く太陽はどれも黄色

国際化の時代といわれて久しい。多くの日本人が海外に出て活躍している。皆さんのなかにも留学をめざしている人が多くいるだろう。ところで、いざ外国へ出かけてみると、あらためて日本との違いを思い知らされる。だが、これは自明のことである。ヨーロッパを例にとってみても、そもそも「初めに、神は天地を創造された」と神が端的に存在することを前提とする民族と、「天地初めて発りし時に、高天の原に成りませる神の名は」と神の生成から説き起こす民族とでは、その考え方が根本的に異なるのは当然のことなのである。言語の習得は大事だが、それだけでは片づかない問題がそこに

はある。異文化理解、異文化交流とはよく聞く言葉であるが、そのことが言うは易く行うは難きことをまず知らなければならぬ。しかしながらまたそのことがいかに重要であるかは、次の出来事が証明している。

すこし昔の話になるが、十三世紀の出来事である。中世ヨーロッパはしばしば十字軍を送った。失敗つづきの十字軍のなかで神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世が率いた十字軍は例外であった。諸民族が共存するシチリアで生まれ育ったフリードリヒは語学の天才であり七カ国語をあやつったが、とくにアラビア語を能くし、イスラムの文化を吸収した。イスラム王朝君主アル・カーミルは敵方の大将フリードリヒのアラビア語で書かれた書簡におどろき、彼がイスラム世界を深く理解していることを知った。こうして両者の接触がはじまり交流がふかまった。そうして、互いがそれぞれの立場を主張す

る困難な交渉の末に武力によらない和平実現にいたったのである。

この話は二つのことを教えている。ひとつは異文化理解が両者の和解の前提であったということ、いまひとつは和解にいたるには己を相手にわからせようとする粘りづよい努力が必要であったということである。国際的という立場がはじめからあるのではない。国際的になるとは、個々の民族がもっている特殊性をすてて普遍にむかうことではない。個々の民族がその特殊性を主張し、また相手の特殊性をも認識することである。そうすることにより、その根底にやどる普遍性が見えてくるであろう。相手に己をわからせるためには、まず己をよく知らなければならぬ。ところが現実には、外国に出てはじめて、われわれはいかに自分が日本のことを知らないかを痛感するのである。日本人が国際的であろうとすれば、まず日本のことをふかく知ら

ねばならない。日本を知らずして、世界を知ることにはできない。

このような事情を見事に言いあらわしている文章をみつけたので最後に紹介しておく。筆者は数学者である。「祖国愛は国際人となるための障害と考える向きもあるが、誤解である。国際社会はオーケストラのごときものである。オーケストラに『チェロとピオラとバイオリンを混ぜた音を出す楽器で参加したい』と言っても、拒否されるだけである。オーケストラはそのような音が必要としていない。バイオリンがバイオリンのように鳴って、はじめてオーケストラに融和する。国際社会では、日本人としてのルーツをしつかり備えている日本人が、もつとも輝き、歓迎されるのである。根無し草はだめである」(藤原正彦『祖国と国語』新潮文庫)。